《日光脇往還》を歩く

―館林・城下町 古地図散歩②―

館林城・城下町

館林城は、市のほぼ中央に位置する、台地上に築かれた平城で、文明３年(1471)の文献史料に初めてその名が登場します。戦国時代には、上野国(群馬県)の重要拠点として位置づけられていました。江戸時代には、徳川四天王の一人である榊原康政が城主となって城郭と城下町の整備に力を注ぎました。その後、徳川綱吉や秋元家など親藩・譜代の７家の大名が城主となりました。江戸時代が終わると、館林城は民間に払い下げられ、火災などもあり、その遺構の多くが失われてしまいました。明治時代には鉄道の開通による近代産業の勃興とともに、館林は製粉業や織物業などの拠点として発展し、城跡には工場の建物群が並びました。昭和50年代から平成５年にかけて工場は移転し、現在は市庁舎や文化施設、公園などに姿を変えて市内外の人びとが集う場となっています。

「日光脇往還」とは

かつての館林城下町は堀と土塁に囲まれ、町外に通じる５つの御門が設けられていました。このうち、南の江戸口御門と北の佐野口御門を結ぶ主要道となっていたのが「日光脇往還」です。元和３年(1617)に徳川家康の霊柩が日光に向かう際に通った道で、江戸と日光を結ぶ日光街道の脇街道になっていたことからこの名称がつけられました。たくさんの店舗が道沿いに建ち並び、城下町の商業の中心地となっていました。「日光脇往還」は、西の太田口から城の大手門方向に向かう「古河往還」、大手門前広場から「大辻」(城下町の中心)を経て町の中心部を西に抜ける「駸町の通り」とともに、城下町の骨格を形成する幹線道になっていました。

「日光脇往還」は現在、主要地方道前橋館林線の一部になっています。近年では館林まつりや七夕まつりがこの通りで行われ、江戸時代の天王祭などで賑わった城下町の名残りを今に伝えています。

写真：「館林道見取絵図」(館林町部分)
東京国立博物館所蔵 (Image:TNM Image Archives)

文化３年(1806)、江戸幕府の道中奉行所によって作成された全国の街道実測絵図「五街道分間延絵図」(全103巻)のうちの１巻。日光脇往還は「館林道」とも呼ばれていました。

江戸時代の日光脇往還の位置



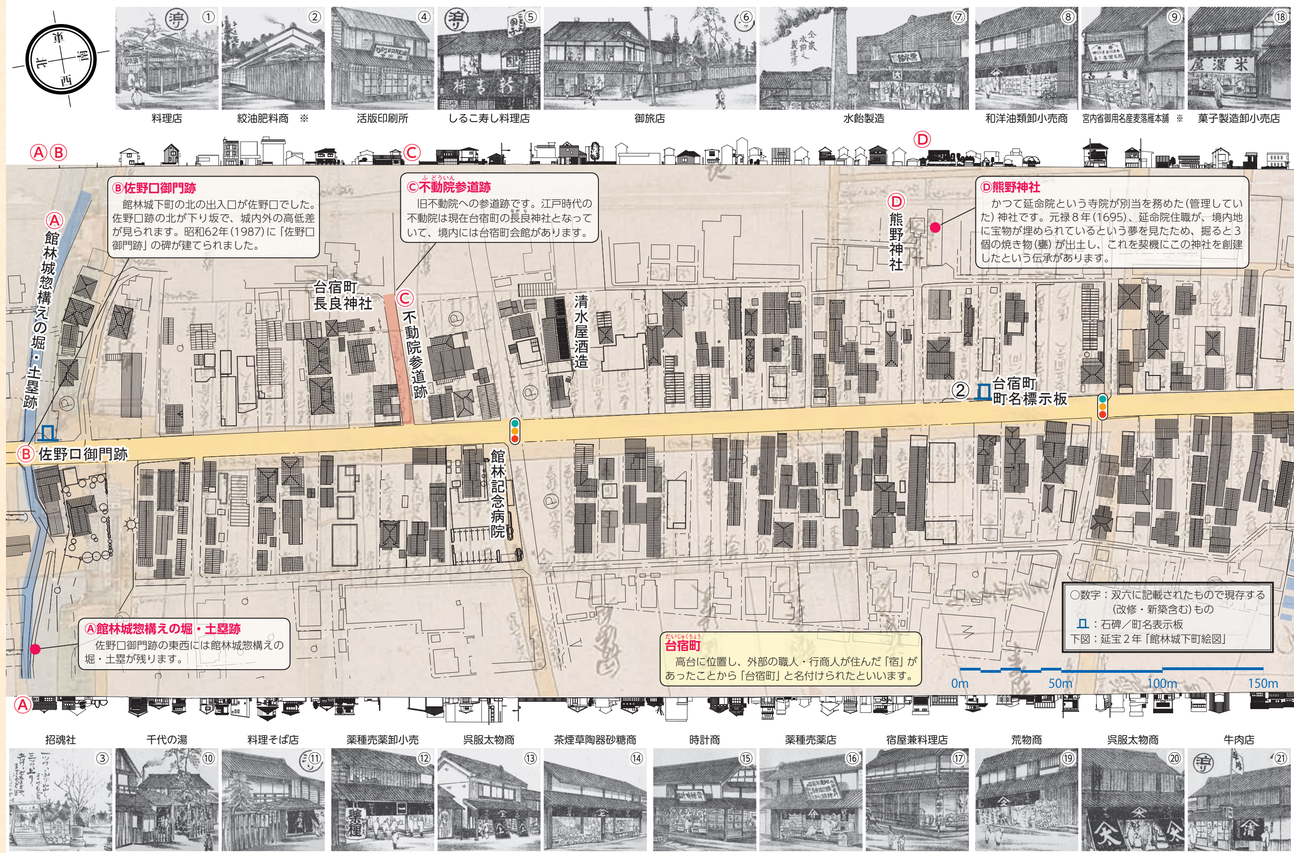
「《日光脇往還》を歩く」の構成

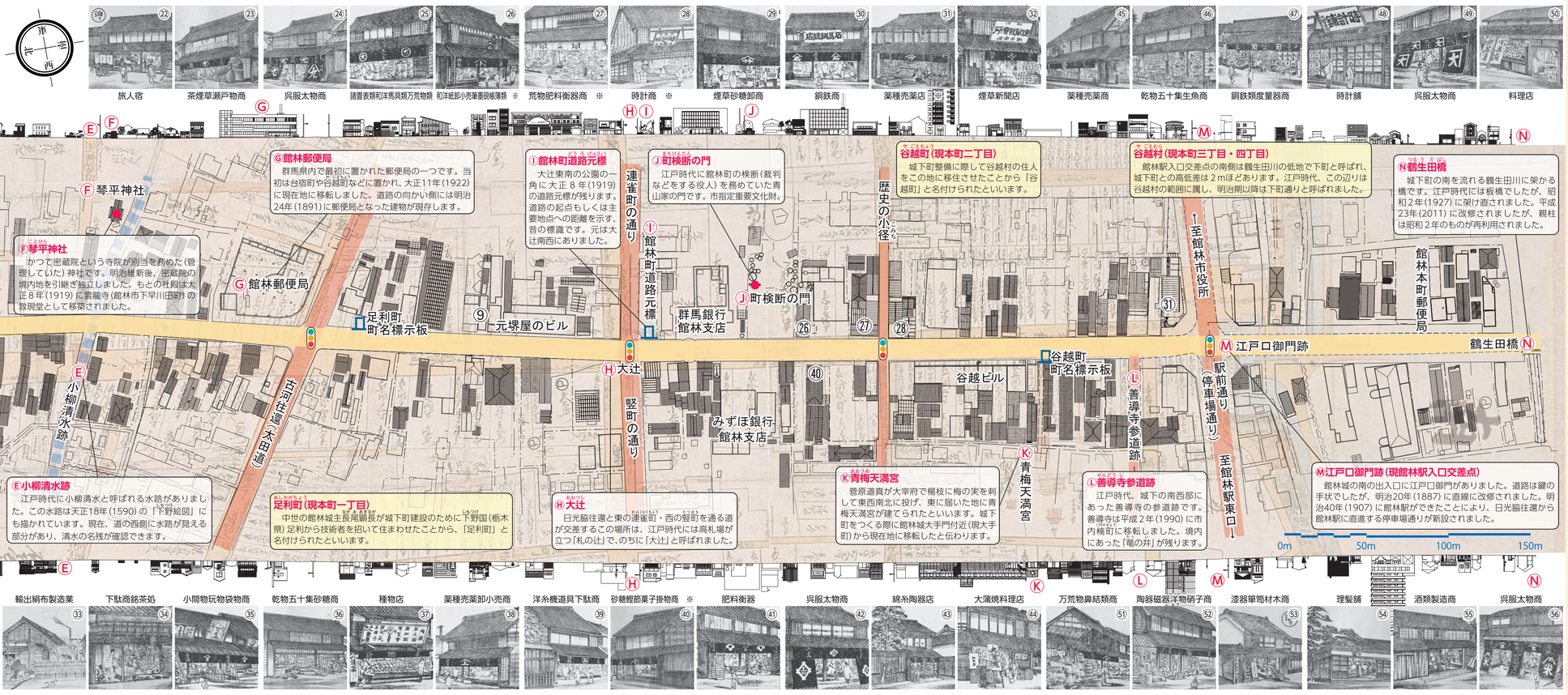
この地図は、館林市街地を南北に通る「日光脇往還」沿いの町並みを、延宝２年(1674)の「館林城下町絵図」※1と明治32年(1899)の「館林市中絵入案内双六」※2、平成29年(2017)の町並みを記録した図面※3とで比較したものです。絵図の上に、日光脇往還のうち台宿町通り・本町通り・下町通り沿いの両側に並ぶ町家の屋根伏図を重ね、外側に同じ場所の町家の連続立面図を配置しました。「絵図」は城下町の範囲までしか描かれていないので谷越村(現本町三・四丁目)は確認できません。その外側に「双六」に掲載された商家の絵を並べています。

※１延宝２年「館林城下町絵図」青山家蔵
※２裏面参照
※３屋根伏図・連続立面図は東京電機大学(教員・学生)の作成による



江戸時代の日光脇往還のルートと現在の主な建造物
(町名の一部は昭和43年以前のもの)





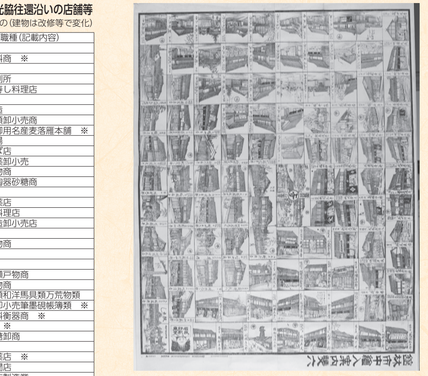
「館林市中絵入案内双六」に記載された日光脇往還沿いの店舗等

※は平成30年時点で現存するもの(建物は改修等で変化)

番号	町名	氏名(屋号・施設名)	職種(記載内容)
①	台宿町	銀石亭	料理店
②	台宿町	合田川佐平	粉油肥料商 ※
③		招魂社	
④	足利町	新栄舎	活版印刷所
⑤	足利町	新青梅醤油	しるこ煮し料理店
⑥	足利町	集屋仁吉	御茶店
⑦	足利町	本島茶店	水飴製造
⑧	足利町	橋田東次郎	和洋油類卸小売商
⑨	足利町	花月堂	宮内省御用名産麦落雁本舗 ※
⑩	足利町	近藤竜平	千代の里
⑪	足利町	青柳庵六三郎	料理そば店
⑫	足利町	加賀美三郎兵衛	薬種売薬卸小売
⑬	足利町	伊藤保三郎	呉服太物商
⑭	足利町	伊藤久蔵	茶煙草陶器砂糖商
⑮	札ノ辻	西藤吉次郎	時計商
⑯	札ノ辻	飯島儀平	薬種売薬店
⑰	札ノ辻	西藤権平	宿屋兼料理店
⑱	谷越町	米沢屋安三郎	菓子製造卸小売店
⑲	谷越町	奈良原金七郎	荒物商
⑳	谷越町	中丸元平	呉服太物商
㉑	谷越町	風場治三郎	牛肉店
㉒	谷越町	亀屋長七郎	旅人宿
㉓	谷越町	田村半次郎	茶煙草瀬戸物商
㉔	谷越町	砂岡九平	呉服太物商
㉕	谷越町	山口清七	諸畳表類和洋馬具類万荒物類
㉖	谷越町	正田喜次郎	和洋紙卸小売筆墨帳薄類 ※
㉗	谷越町	小林平十郎	荒物肥料衛器商 ※
㉘	谷越町	米沢屋清吉	時計商 ※
㉙	谷越町	橋田福三郎	煙草砂糖卸商
㉚	谷越町	石島万次郎	銅鉄商
㉛	谷越町	竹森清吉	薬種売薬店 ※
㉜	谷越町	新井音吉	煙草新聞店
㉝	谷越町	関口善次郎	輸出絹布製造業
㉞	谷越町	小林彦次郎	下駄商銘茶処
㉟	谷越町	樋田井吉	小間物玩物袋物商
㊱	谷越町	木島房吉	乾物五十集砂糖商
㊲	谷越町	東條松五郎	種物店
㊳	谷越町	伊藤半蔵	薬種売薬卸小売商
㊴	谷越町	伊藤清三郎	洋糸機道具下駄商
㊵	谷越町	小室庄七	砂糖鰹節菓子掛物商 ※
㊶	谷越町	上野伊三郎	肥料衛器
㊷	谷越町	小室粂三郎	呉服太物商
㊸	谷越町	町田岩蔵	綿糸陶器店
㊹	谷越町	松島屋海六	大蒲焼料理店
㊺	下一町	宮杉祐七	薬種売薬商
㊻	下一町	小池定吉	乾物五十集生魚商
㊼	下一町	坂田吉次郎	銅鉄類度量器商
㊽	下一町	大野藤一郎	時計舗
㊾	下一町	大津貞三郎	呉服太物商
㊿	下一町	小倉為蔵	料理店
51	下一町	正田治平	万荒物鼻結類商
52	下一町	宮杉孝治	陶器磁器洋物硝子商
53	下一町	勝野伊三郎	漆器箪笥材木商
54	下一町	福田清作	理髪舗
55	下一町	星野松平	酒類製造商
56	下一町	米沢屋伊左衛門	呉服太物商

「館林市中絵入案内双六」

明治32年(1899)に発行された双六です。右下に「振出し」があり、右回りでコマを進め、中央が「上り」です。マスは105個あり、振出しの「館林尋常小学校」(現在の第一小学校)から、上りの「躑躅岡公園景」(現在のつつじが岡公園)へ、旧城下町の店舗などを経て進みます。日光脇往還沿いには56の店舗などが描かれています。なかには現存する店舗や建物もあり、それを見つけるのも一つの楽しみ方です。



明治32年　館林市中絵入案内双六(館林市立資料館所蔵)



館林市中絵入案内双六のうち「上り」の部分(躑躅岡公園景)

《日光脇往還》を歩く
――館林・城下町 古地図散歩②――

編集・発行　館林市教育委員会　文化振興課(市史編さんセンター)
〒374-0018　館林市城町2番3号
TEL 0276-76-7651

編集協力　東京電機大学未来科学部 建築学科建築史研究室

図版提供　青山守治氏
東京国立博物館
館林市立資料館

印刷　朝日印刷工業株式会社

2018